

○露木裕子 佐藤眞知子 渡部旬子
(文化女大)

<目的>

着衣に発生するしわは、種々の力学的要因により表面に不規則な折り曲げが生じたものであり、一般的に着衣の外観を損なうものとされているが、これは人体の動作による形態変化により衣服が追随しきれずに生じた結果である。

本研究では、日常生活において着衣に発生するしわ（着用じわ）がどの部分にどのように発生しているか、その実状を把握することにより、着心地の良い衣服パターン設計の基礎資料とすることを目的とする。

<方法>

着用じわの発生状態をとらえるために、日常生活の各所で、ジャケット着用者の写真を撮影し、得られた写真データから着用じわの特徴を、その程度（数・量・長さ）と状態（動作や姿勢・部位・方向）等の項目別にとらえ、発生現象を目視で段階的に分類した。その結果、<脱衣後もそのまま残る定着したしわと動作や姿勢により一時的に発生したしわ>、<つれじわと余りじわ>、<気になるしわと気にならないしわ>に3分類した。

<結果>

目視観測した結果、脱衣後もそのまま残る定着したしわは、椅子の背もたれの跡。動作や姿勢により一時的に発生したしわは、後ろ側面と上腕前部。発生量の少ない割に気になるとされたのは、ヨコ方向のしわ（つきじわ・たなじわ）であり、多いのに気にならないとされたのは、タテ方向のしわ（袖つけ付近に出来るだきじわ）であった。